

論文審査の要旨

| | | | |
|--|----------------|-----|-------|
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 （ 教育学 ） | 氏名 | 成 利 楽 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1・2項該当 | | |
| 論 文 題 目 | | | |
| <p style="text-align: center;">日本語教師の成長ニーズと関連要因 —中国の大学日本語教師を対象に—</p> | | | |
| 論文審査担当者 | | | |
| 主 査 | 教 授 | 渡 部 | 倫 子 |
| 審査委員 | 教 授 | 間 瀬 | 茂 夫 |
| 審査委員 | 教 授 | 永 田 | 良 太 |
| 〔論文審査の要旨〕 | | | |
| <p>本論文は、中国の大学日本語教師の成長ニーズ（自身が成長させたい資質能力）の構成概念を解明し、その成長ニーズに関連する個人要因（資質能力の自己評価、職能的アイデンティティ）と環境要因（教室環境、同僚性、組織環境、専門性開発環境）との関係性を検証したものである。この目的を達成するために、以下の課題を設定した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 中国人大学日本語教師の成長ニーズの構成概念は何か。 2) 中国人大学教師の成長ニーズに関連する個人要因（資質能力の自己評価、職能的アイデンティティ）の構成概念は何か。 3) 中国人大学日本語教師の成長ニーズに関連する環境要因は何か。 4) 中国人大学日本語教師の成長ニーズと個人要因、環境要因はどのように関係しているか。 <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、問題の所在と本研究の目的を述べた。</p> <p>第2章では、教師の成長ニーズをめぐる概念の変遷、資質能力に焦点を当てた教師の成長ニーズに関する研究、成長ニーズに関連する個人要因と環境要因についての論考を整理した。その後、日本語教師の資質能力及び日本語教師の成長ニーズに関する研究を概観したのちに、先行研究の知見と残された課題について論じた。先行研究の課題を踏まえ、本研究では、以下のように研究課題を設定した。</p> <p>第3章では、教師の資質能力に対する成長ニーズの構成概念と関連する個人要因の構成概念を明らかにすることを目的とした調査Ⅰの結果を示した。調査Ⅰでは、質問紙調査を実施し、中国人大学日本語教師104名に35個の資質能力を提示し、どれほど成長させたいのか（成長ニーズ）、自分がどれほど持っているのか（資質能力の自己評価）、自分の目指している理想的な日本語教師像（職能的アイデンティティ）にどれほど必要なのかを5段階評価するよう求めた。因子分析の結果、中国人大学日本語教師の成長ニーズは「学習者と関わる能力」「外国語教育知識・能力」「職能開発実践能力」「研究能力」「授業力」で構成されており、成長ニーズも同様の因子構造であることが明らかになった。また、その構成概念が中国教育部の公表した「外国語教師に求められる資質能力」の枠組みとほぼ一致</p> | | | |

していることもわかった。一方、職能的アイデンティティの因子構造は「学習者に関わる能力」「外国語教育知識・能力」「研究能力」「授業力」となっていた。「職能開発実践能力」が因子として抽出されなかったのは、教師の職能的アイデンティティの一部として内在化されていない可能性があるかと推察した。その原因として「職能開発実践能力」に関連する研修内容や機会の不足、一部の教師が「職能開発実践能力」の重要性を認識していないことが挙げられる。

第4章と第5章は、中国人大学日本語教師の成長をめぐる教育環境の考察を踏まえて、教師の成長ニーズと関連する個人要因、環境要因の関係性の検討を目的とした。調査Ⅱでは、中国人大学日本語教師213名を対象とし、調査Ⅰで得られた資質能力を用いて、調査Ⅰと同様の質問をしながら、教室環境、同僚性、組織環境、専門性開発環境に対する教師の認識についても調査した。その結果得られた各環境要因の平均値より、中国人大学日本語教師は良好かつ協力的な同僚関係に恵まれており、学習者とも良い関係を構築できていることが示唆された。しかし、組織環境と専門性開発環境については、教師は教育改革に直面しているにもかかわらず、大学・国・地方政府などから専門性開発の機会やリソースが十分に提供されていないという課題が明らかになった。さらに、成長ニーズと関連要因との関係性を探るために、構造方程式モデリングでモデルを構築し、モデルの適合度を確認した。その結果、環境要因は、成長ニーズに直接影響していると同時に、職能的アイデンティティを介して間接的にも成長ニーズに影響していることがわかった。また、個人要因については、職能的アイデンティティが成長ニーズに対して直接的で強い正の影響を与えていることが明らかになった。しかし、資質能力の自己評価は成長ニーズにあまり影響を与えていないことが示唆された。

第6章では、調査Ⅰと調査Ⅱの結果について総合的に考察し、教師の継続的専門性開発への示唆を述べた。さらに、本研究の限界を踏まえたうえで、今後の課題をまとめた。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 資質能力に対する日本語教師の成長ニーズの構成概念とその特徴を明らかにした。これまでの日本語教師の資質能力の開発に関する議論においては、専門家や公的機関の立場から求められる資質能力が扱われることが多い。本研究で得られた日本語教師自身が考える成長ニーズの特徴は、教師の継続的専門性開発に多くの示唆を与えるものである。

2. 中国における日本語教師の成長に関わる環境要因を、教室環境、同僚性、組織環境、専門性開発環境の実態を明らかにした。日本語教師の専門性開発が注目されている中、彼らの置かれている環境について言及した研究はあまりなかった。環境の現状を解明したことにより、今後の専門性開発環境の整備に有益な情報を提供できた。

3. 教師の成長ニーズと関連要因の関係を解明し、現職教師の継続的専門性開発を目的とする教師教育モデルを新たに示した。この専門性開発モデルは、日本語教師教育だけでなく教師教育研究の発展にも寄与できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。